

公開講演会要旨

掘立柱建物の推移 古代建築は寺院や官庁の中心的な建物などに礎石建物を用いるほかは、掘立柱式の建物が最も広く用いられていた。このような掘立柱式建物の発生から、奈良時代の隆盛を経て、中世・近世に受け継がれた経過を明らかにすることを目的として、講演会では都城、宮殿、国衙、郡衙、集落の発掘例から、それぞれの建築の配置、平面形式、規模などを分類整理して比較検討を行なった。

なお、この問題については『富山県埋蔵文化財調査報告Ⅲ』（富山県教育委員会、1974）の中で詳論した。
（宮本長二郎）

古代の土馬 土馬の製作目的については諸説があり、不明な点が多い。そこで基礎作業として、全国の8割の出土例を占める畿内の例を中心に、形式分類をおこない、各形式実年代を求めて変化の方向を検討した。

土馬は古代の農業村落遺跡をはじめ諸遺跡から出土するが、藤原宮、平城宮など古代の中央官衙からも多量に出土する。平城宮では、すでに70例を越えており、とくに東辺部を南北に流れる東大溝とその周辺から多く出土している。その周辺に土馬の祭祀とかかわった官司が存在したことが予想される。また、中央官衙から土馬が出土する背景についてもふれた。

詳細は「物質文化」第25輯を参照。
（小笠原好彦）

古代炊飯具の系譜 弥生・古墳時代の瓶形土器の諸特徴・編年・地域差・系譜・用途についての研究成果を講演した。

I期は弥生前・中期で、甕に2次的に穿孔した転用品の盛行期。II期は弥生後期～古墳時代前半期で、畿内で小形鉢形のものが出現し、各地へ伝播した時期。使用痕・出土状況・系譜的関係を検討して、これらが甕として使用されたことを実証。転用品や小形品が主体であること、出土量が著しく少ないことから、甕は特殊な場合にのみ使用され、炊飯具の主流は甕であったことを実証。III期は古墳時代後半期で、大形の本格的な甕の出現と普及期。米の調整法の変革の過程と地域差について述べた。さらに、稻作伝播の経緯を明らかにする観点から、中国、朝鮮の古代炊飯具と比較検討し、朝鮮の例との系譜的関係を問題として指摘した。（木下正史）

奈良時代の大嘗祭 これまで史料の制約などにより言及されることの少なかった奈良時代の大嘗祭の実態につき、次のことを述べた。(1)平安時代以後と同じく、11月下卯の日だけではなく、その前後の長期間に亘る行事であること、(2)平安宮では朝堂院に大嘗宮を設けるが、平城宮では太政官院に設けること、(3)平安宮では巳の日以後の饗宴を豊楽院で行なうが、平城宮では朝堂で行なうこと、(4)平安宮の北野斎場に相当するものを、平城宮でも場所は不明であるが設けているらしいことなどで、すでに奈良時代に大規模な行事として整備されているが、平安宮と平城宮では、その際の殿舎の使用状況にかなり相異がみられる。
（加藤 優）